

むつごろう通信

16号

2009年

9月28日発行

新センター長の嶋田です。どうぞ宜しくお願いします。



はじめまして、4月より前任の内野明德教授に代わって新しく第2代センター長を拝命しました大学院自然科学研究科の嶋田 純と申します。専門は地下

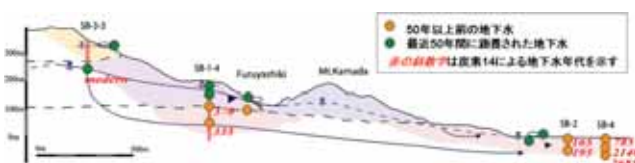
水を含む水循環の実態解明を主体としている水文学(すいもんがく)で、特に水と共に挙動する自然界の同位元素を利用して循環の起源や循環に要する時間把握を明らかにする研究をしています。

私の研究は陸域での水循環を対象とするものですが、水循環は海域と陸域の双方を廻っている関係から、沿岸域は重要な研究対象です。断面図は、最近実施した不知火海湾奥の永尾地区での地下水研究の成果です。図に見られるように平均水深2mの不知火海湾奥の海底には2000年前の降水が閉じ込められた淡水性の滞留地下水があることが分かってきましたし、三角半島の不知火海沿岸には多くの自噴井戸が干潟にあって、半島尾根部から浸透した地下水が200から300年程度のゆっくりした時間をかけて沿岸部の海底地下水湧出として流れ出

ていることも分かりました。現在はこれらの地下水流れを通した八代海や有明海への様々な物質の輸送実態を研究しており、従来知られていなかった地下水経由の内湾への環境負荷の実態を把握したいと考えています。

広辞苑で『沿岸』を調べてみると、『河海または湖に沿った陸地、あるいは陸地に沿った部分』とあります。すなわち当センターは、閉鎖性が非常に高い内湾で、潮の干満差が極めて大きいという特色をもっている有明海・八代海という海域とその沿岸部を研究対象として、地域の人々の生活の場である『沿岸域』における長期的に安全で安定した生活が営めるように、基礎科学的研究と応用科学的研究を遂行すると共に、それらを通じた教育を行うユニークな場と定義できます。多くの人々が居住している有明海・八代海沿岸地域では、周辺流域からの人為的な環境負荷が内湾の水質環境に大きな影響を及ぼし、その生態系に様々な変化を与えています。有史以来人々の豊かな生活の場として利用されてきた沿岸域を、未来永劫持続的に利用できるような方策に資するべく当センターでの研究・教育があるといえましょう。

内野前センター長の築いた8年間の成果を更に発展させて、地域の皆様にも役立つセンターとして機能させてゆく所存です。今後とも何卒よろしくご支援をお願いしつつ、新任のご挨拶とさせていただきます。



三角半島永尾地区(古屋敷集落～かまだ山～永尾神社を通る断面)の地下水年代分布